

4. 地域の子どもたちへのヘルスプロモーションに むけた予防接種の普及

○朝野春美・築瀬順子・吉川佳孝（自治医科大学とちぎ子ども医療センター）
川口千鶴（順天堂大学）

【目的】

子どものヘルスプロモーションを高めるケアの必要性があると言われている（健やか親子21）が、それに向けた看護の構築はいまだ少ない。予防接種は、多くの子どもたちが病院で最初に出会う痛み体験のひとつである。幼児期になると、なぜ注射をするのか、痛くないのかなど子どもは疑問や質問を発する。しかし、保護者は子どもの疑問に答えられず、注射の話をするのが怖がるからと黙って病院に連れてくることもある。そこで今回は、就学前の幼児を対象に、子どもが予防接種の必要性や意味を知り、医療処置の一部を看護師あるいは子ども同士の交流を通じた体験で、予防接種を受ける際の心理的準備（心構えを作り、子どものがんばる力を引き出す）ができるようになることを目指した予防接種に関するプログラムを実施し、その効果を明らかにすることを目的とした。また、地域への予防接種普及活動を通して、健康教育の定着を目指した。

【方法】

「予防接種ってなに？」の内容はFlashムービーで作製し、予防接種の方法・手順・内容はPowerPointで作製する。ムービー立て看板に投影しながら説明を行った。プログラムの実施時間はおよそ30分（評価を含む）を目安とした。



1. プログラムの実施方法

- ①対象者(プログラム参加者)： 幼稚園(保育園)に通園している4～5歳前後の子どもと保護者で、1回の実施につき2～7組であった。
- ②観察者：幼稚園教諭(保育士)・看護師
- ③実施者：本研究者(看護師)《1名の研究者が実施し、1名の研究者が必要時補助を行った。研究者・補助者とも小児看護の臨床経験が5年以上》
- ④実施場所：承諾の得られた幼稚園4園、保育園1園
- ⑤実施日：2011年5月～2011年9月の計6回
- ⑥倫理的配慮：参加者へは、文書を用いて研究の主旨、内容、方法、自由意思での参加で

あること、途中で取り止めても不利益がないこと、結果公表における匿名性の保持などについて説明し同意書を得た。本研究は研究者施設の自治医科大学疫学倫理審査委員会の承認のもとに実施した。

2. 評価方法

本プログラムの評価は以下の方法で行った。参加者のプログラムへの参加状況については、観察者の幼稚園教諭（保育士）への質問紙と観察者の看護師のグループインタビューにより評価した。子どもの反応や変化については保護者への質問紙によって評価した。

①幼稚園教諭（保育士）への質問紙

プログラム実施中は、子どもたちのことをよく知っている幼稚園教諭(保育士)2名程度に観察を依頼した。終了後直ちに質問紙にて観察内容を確認した。

*アンケート項目：プログラム参加前・中の子どもたちの様子、プログラムについて、健康教育についてなど

②看護師のグループインタビュー

1回のプログラム実施に、看護師1～2名に参加を依頼した。全プログラム終了後、看護師へのグループインタビューを行なった。(30分程度)インタビューは、看護師の同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

③保護者への質問紙

保護者にはプログラム開始前に質問紙への協力を依頼し、プログラム終了後、郵送で回収した。

*アンケート項目：プログラム前・中・後の子どもの様子、プログラム内容の適切さ、このプログラムの今後の活用など

【結果】

1. 実施状況

対象	参加数	アンケート回収数（率）
参加者親子（組）	26	22（85%）
幼稚園教諭・保育士	7	7（100%）
看護師	5	

2. 保護者・幼稚園教諭アンケート結果（4段階評価で肯定的評価の割合）

<プログラム実施前の子どもの様子>	保護者	幼稚園教諭・保育士
プログラムは何をするのか子どもたちなりにわかっている様子だった	45.6%	28.4%
プログラムに参加することへの興味をもった様子だった	68.1%	75.8%
プログラムに対して不安を持った様子だった	27.2%	14.2%

＜プログラムに参加中の子どもの様子＞	保護者	幼稚園教諭・保育士
実施中プログラムに興味を示していた	95.4%	100%
プログラムの内容はわかっている様子だった	81.4%	100%
予防接種をすることで病気にかかりにくくなることがわかった様子だった	90.8%	100%
予防接種をする時にはどのようにすればよいかわかった様子だった	81.8%	100%

＜プログラム参加後の意見＞	保護者	幼稚園教諭・保育士
プログラムの内容は子どもたちに適切である	90.8%	100%
プログラムの実施時間は適当である	81.7%	100%
プログラムへの参加により子どもは予防接種や健康に興味を持った	81.7%	100%
次の予防接種で子どもが、がんばろうという気持ちになると思う	90.8%	85.6%
今後、このプログラムを使って子どもに説明や励ましをしようと思う	100%	71.3%

3. 看護師のグループインタビューの結果

看護師のグループインタビューの逐語録からプログラムの評価に関することを整理した結果以下の項目があった。

- ・ プログラムの内容や使用した媒体については、子どもが理解しやすく、子どもの興味を引くものだった。
- ・ 子どもへの健康教育については、対象年齢・集団などへの配慮が必要である。
- ・ 親子で参加することの意義については、保護者がいることで子どもが安心して参加できる・子どもがどのような説明を受けているかを知ることにより、保護者が説明方法を学べる。
- ・ 実施者としてプログラムを実行する場合については、自分たちでもできる・新鮮な活動である。
- ・ 看護職が地域で健康教育を行う意義については、子どもや親に医療機関を身近に感じてもらえる・親に看護師を日常的な健康に関する相談者として認識してもらえる・地域の健康ニーズが把握できる。
- ・ 今後の発展性については、看護師にとって地域での子育ての状況やニーズなどが分かる・幼稚園などで定期的なヘルスプロモーションの機会として活用できる・育児支援につながる・実施にあたっては環境（所属医療機関を含めて）の整備が必要である。

【考察】

<子ども>

映像を用いて子どもたちの興味をひきつけたことは、プログラムを楽しみながら、集中して参加する上で、効果的であったと思われる。映像を通して、目には見えない身体の変化を表現し、また実際の予防接種の方法や画像を見せ正確な情報を伝えることで、予防接種についての理解を促し、自分の身体や健康へ関心を持つことが期待できる。また、プログラム参加により、子どもが予防接種の必要性を知ること、処置の1場面を看護師との交流を通してイメージすることで、予防接種を受ける際の心理的準備を助けることが期待できると思われる。幼稚園（保育園）で、プログラムを実施したことは、顔見知りの園児同士の参加や慣れた環境により、プログラムへの参加や看護師との交流に対する子どもの緊張感を高めず、子どもらしさや積極性を引き出す上で効果的であったと考えられる。このことは、看護師が地域で健康教育を実施することの意義や医療機関を身近に感じることへの効果につながると考える。しかし、保護者との参加により、子どもの保護者に甘える気持ちなどから、参加した子ども同士のグループダイナミクスを引き出すことができない場面があったため、今後のプログラムの構成や内容への課題としていきたいと考える。

<保護者>

保護者にとっては、プログラムを通して、子どもに対する説明の必要性を理解するきっかけとなったと考えられる。小児看護では、子どもへの説明やプレパレーションの必要性は、すでに定着しているが、地域ではまだ浸透に至っていない。今回のプログラムでは、看護師が子どもを対象として健康教育を実施し、それを保護者が見学するというかたちの参加としている。保護者は、子ども自身が理解することによって不安が軽減され、納得することで心構えや頑張る気持ちを引き出せることにつながることがわかったと考えられる。また、看護師の説明で、正確な情報を子どもに教え、余計な不安や恐怖を与えないことへの期待も大きいと思われる。今後は子どもへの健康教育と並行して、保護者に対する予防接種、および子どもへの健康教育の必要性などについてのプログラムを検討していく必要があると考える。

<幼稚園教諭>

幼稚園教諭からは、構成や進行方法についての意見が多く聞かれた。構成は、対象年齢を4～5歳として作成したため、子どもの成長発達を考慮した構成にすれば、対象年齢を変えてできることが示唆された。進行方法としては、子どもと実施者が駆け引きをしながら行ったので、子どもたちもプログラムへ参加し楽しそうであったとの意見があった。また、予防接種以外にも、健康教育として清潔や排泄についてのプログラム化の要望があり、幼稚園としての健康問題への関心の高さが伺えた。

<看護師>

親子で一緒にプログラムに参加することに対しては、一緒にいることで安心している様

子の児と、甘えてしまい集中できない児がいたので、肯定的な意見と否定的な意見があり、参加方法については再検討の必要性を感じた。またグループインタビューの結果から、看護師の地域での健康教育の参加に対する必要性の理解や興味・関心が伺えた。また、参加した看護師は医療機関ではない場所で健康教育を行うことの意義も理解していた。しかし、実際に病院やクリニックで勤務している看護師が地域での健康教育に参加するためには、所属管理者の理解、労働環境（マンパワー、時間、給与など）についてなど、様々な調整や協力が必要不可欠であることが課題としてあがった。それらの課題への対応について検討を重ねていく必要があると考える。

【まとめ】

このプログラムは地域の医療機関と連携を図りながら、幼稚園・保育園に出向いて実施した。子どもたちが日常生活している場（幼稚園・保育園）で看護師が実施することは、子どもの緊張感を和らげ、医療機関を身近に感じることも期待できる。また、地域医療機関の看護師などにも参加を呼び掛け、地域で生活する子どもたちの健康教育と一緒に考えていくことで、子どものみならず家族をも含めた健康支援づくり（ヘルスプロモーション）に広がっていくことが期待できる。病院から地域に出向き、健康教育の広報活動を行うことが医療者には求められる。

地域で生活する子どもたちへの健康教育や健康支援づくりの重要性が高まり、地域に広がり根付いていくためには、どのような時期や機会に実施することがより効果的であるか、更なる検討が必要であり、今後の研究課題としていきたい。

【経費使途明細】

費目	明細	金額（円）
会議費	お弁当・お茶代	20,000
交通費	会議及びデータ収集	51,000
謝礼	参加園児へ粘土セット	24,000
	幼稚園教諭・看護師へハンカチセット	18,000
	幼稚園へ菓子折り	20,000
通信費・送料	資料送料・備品送料・切手	13,000
謝礼金	アンケート集計 1000 円×17 時間	17,000
備品購入費	IC レコーダー2 個・ワゴン・延長コードなど	41,300
	動画編集ソフト・マウスポインターなど	60,000
事務用品・印刷	コピー用紙・封筒・ファイルなど	5,700
書籍	4 冊	30,000
	合計	300,000